

夜の勤行のお知らせ

全ての方が月曜日から金曜日の9時から5時に働いているわけではありません。仕事や用事で日曜日のサンデーサービスに来るのが難しかったり不可能な方もいらっしゃると思います。そのような方々のために夜の勤行を行います。

2月19日（木） 午後7時
2月26日（木） 午後7時

クリスティーナ・ヤンコ先生

レクチャーシリーズ

仏教と論争

2月5日（木） 午後7時から

仏教と戦争

2月12日（木） 午後7時から

仏教と政治

クリスティーナ・ヤンコ先生

レットークダルマ

「仏教徒として、仏さまのみ教え（三宝の二番目として知られる法）に帰依するとき、私達は実は苦しみからの解放の最終的な境地への見込みと、そのような境地を得ることによって得る道または方法の両方に帰依するのです。」

ダライ・ラマ 「開かれたところ」

このようなテーマで2月22日（日）
3月29日（日）、4月26日（日）、5月31日（日）にディスカッションを開催します。
サービスの後、12時30分からメザニーにて

ミニスターズアシスタント
デニス・マドコロ

日々の仏教用語

有り難い

「ありがとう」は日常、感謝の意を伝える言葉として使われています。しかしこれは英語のサンキューとは違って、ただ単に感謝をしているという意味だけではありません。語源は「有ること」が「難い」だから「滅多に無い」「珍しくて貴重だ」という意味でした。仏教から来た言葉なのです。『法句経』に「ひとの生をうくるは難く、死すべきものの、生命あるもありがたし」、三帰依文には「人身受け難し。今既に受く、仏法聞き難し、今既に聞く」とあります。人と生まれた生命の驚きと、聞き難い仏法を聞き、生命への尊貴さへ目覚めた大いなる感動を表す言葉なのです。

イスラムを学ぶ

他の宗教の伝統を学ぶことは複雑化する現代社会で重要なことです。そこで今回イスラム教の学者に来ていただきレクチャーをして頂きます。

2月15日（日）午後1時



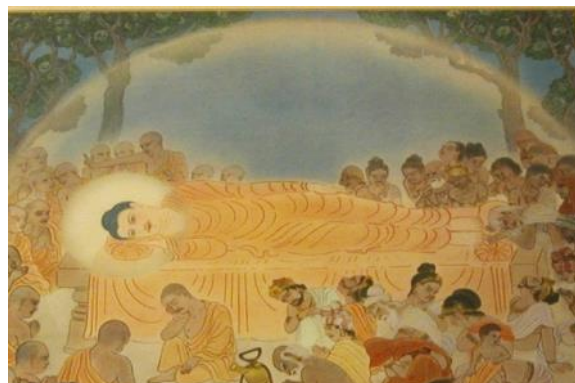
ムハンマド・アフザイ・ミルツァ氏は1976年イスラム教大学を卒業。パキスタンとアメリカの様々な都市でイスラム教の伝道師として活躍。現在、ミシサガのイスラム教研究所副所長。トロントのラジオ番組で現代のイスラム教に関する問題にレギュラー担当している

涅槃会

（お釈迦様が入滅された日）

2月15日（日）

午前11時より



今月の法語

弘誓のちからをかぶらずは
いづれのと看にか娑婆をいでん
仏恩ふかくおもひつつ
つねに弥陀を念ずべし

高僧和讃 善導讃（八六）

メディテーションクラス

2月9日（月）午後7時

2月23日（月）午後7時

阿弥陀如来はその本願で仏を信じ南无阿弥陀佛と念仏するものを浄土に迎え、仏にすると誓っています。このメディテーションクラスではお経を称えた後、南无阿弥陀佛と大きな声で称えながら本堂を歩きます。そして静かに座ります。

ぜひ、忙しい日常から解放され、深く心落ち着く実践を体験してみてください。

八万の法蔵章の大意

釈尊がお説きになった教えをすべて知っているとしても、後世のことを知らないものは愚者であり、たとえ文字一つ知らないとしても、浄土に往生するいわれを知るものは、智者であるといえます。

ですから、浄土真宗では、たくさんのお聖教を読んでいろいろのことを知っていても、信心一つでたすかるといういわれを知らなければ、むなしいことだと思わなければなりません。

親鸞聖人のお言葉にも、どんな人も阿弥陀如来の本願を信じなければ、決してたすかることはない、とあります。

ですから、どういう人であろうと、自力にたよることをやめて、おたすけくださいと二心なく深く阿弥陀如来を信じおまかせするならば、十人は十人、百人は百人、みな浄土に往生できることは、まったく疑いありません。

(五帖第二通)

敬 弔

次の方々が御往生されました
生前のご苦勞を偲び、謹んで敬弔の意を表します。

桂 敏子様 八十九歳 一月五日往生

枝村 ジョージ 正一様

七十六歳 一月六日往生



年忌(年回)法要

次の年にご往生された方は年忌法要が回ってまいります
個別での法事をご希望の場合はお寺までご連絡下さい

一周忌(二〇一四年) 三回忌(二〇一三年)

七回忌(二〇〇九年) 十三回忌(二〇〇三年)

十七回忌(一九九九年) 二十三回忌(一九九三年)

二十五回忌(一九九一年) 二十七回忌(一九八九年)

三十三回忌(一九八三年) 五十回忌(一九六六年)

まとめ役の方々に感謝



トロント仏教会での餅つきは何十年も続く伝統です。何百人ものボランティアがホリデーのための餅を作りにお寺に集まります。一年の終わりにやってくる私達のお寺の重要なイベントです。

皆さん、気づきましたか？餅つきのようなイベントがお寺の鍵となるメンバーのまとまる力にいかにかに頼っているかを。

このような方々に心から感謝します。私はこのような鍵となる彼らを「生きる宝」と呼んでいます。彼らのお陰で私達は餅を作るための輝かしい二日間に集まるのです。

若者とそんなに若くはないもの、しかし心は若い人、新しいお寺のメンバー、メンバーの友達、県人会、と様々なコミュニティの人々からなる驚くべき集まりです。私達は皆、餅を作るために来るのです。

餅ができた後、たくさんの人々が餅を買いに例年の寺への巡礼に出ます。やはりこれは様々なコミュニティの人々からなる驚くべき集まりです。これは餅を作る人、買う人両方から大切にされる伝統です。

まとめ役といえ、私はこの能力を持った、~~XXXX~~という友人がいます。彼は定期的に友人を集め夕食などに行きます。集まる我々は~~XXXX~~に感謝しています。

我々のほとんどは~~XXXX~~のような人を知っていると思います。

ます。物事を進め、人々をつなぐ。これはわずかな人々が持つ才能です。やはり~~XXXX~~は「生きた宝」です。~~XXXX~~は仏教徒ではありませんが仏性を持っていると断言できます。

我々全てがこのようなまとめ役にはなれませんが、頼まれたとき助けを貸すことで感謝を示せます。

親切を理解し、感謝で応える

これはお寺が毎年配っている二〇一四年の仏教伝道協会のカレンダーの言葉です。

私達が「まとめ役」のような人々に会うとき、彼らのまとめてくれる親切に応えるには、我々ができるところで手助けすることで感謝を伝え、また単に「有難う」と言えはいいのです。

「親切」「感謝」といったトピックについて「レットーク ダルマ」で話し合います。二〇一五年二月二十二日（日）十二時三〇分、メザニーでお会いしましょう。

合掌

ミニスターズアシスタント

デニス マドコロ

佛心

二〇一五年二月号

浄土真宗

トロント本願寺

命懸けて仏法を聞く

私が学んだ京都の中央仏教学院では毎朝、クラスの開始前に先生、学生全員が起立合掌して「開講偈」という言葉を唱和します。

「無上甚深微妙の法は、百千万劫にも遇い値こと難し。我、今、見聞し、受持することを得たり。願わくは如来の真実義を解したてまつらん」



遇い難い佛法に出会えたことを喜び命がけて佛法を学ぶという決意を表明するものです。しかしながら実の所、我々は、むろん私を含め命がけてみ教えに向き合っているのでしょうか？あるキツネの譬え話をいたしましょう。

ある森にキツネが住んでおりました。なかなか自分で獲物が獲れないのでヒョウやライオンの食べ残しにありついて何とか暮らしていましたが、ある日余り物にも恵まれず、空腹のあまり、城壁を超え村の長者の家に忍び込みました。真夜中、一生懸命食べ物をあさりましたが肉片一つ見つけられませんでした。力尽きて戸棚の横で眠ってしまいました。朝になって気付いた時にはたくさんの人に取囲まれておりました。「ああもう逃げられない。」とっさに判断し死んだふりをして、様子を見ることにしました。

すると一人の男が「うまそうだ。俺はこいつの耳を食べるぞ。」と言つて耳を切り取りました。キツネは思いました。「耳は痛いけど身体はまだ大丈夫だ。もう少しじっとしていよう。」すると別の男が「俺はしっぽをもらおうぞ」と言つて持ち去りました。「しっぽは痛いけどこれくらいならなんとか我慢できるぞ。」キツネの心にはまだ余裕がありました。しかし次の言葉を聞いた時、「俺はこいつの牙をいたさうぞ。」キツネは考えました。「どんどん持っていくやがる。もし首を持って行かれたらおしまいだ。」キツネは恐怖に

襲われて飛び上がり全ての知恵を使って最短の近道を求め一目散に走つて逃れました。キツネは死の恐怖に直面して初めて命懸けの姿勢を取ることができました。「もっと早く逃げていたら傷つかなくてよかったのに、、、なんてバカなキツネだろう。」なんて私は言えません。まさしく私自身この仏法の素晴らしさを認めていながら、また人間に生まれ仏の教えを聞くための条件をいただいているにも関わらず居眠りしているような、まだまだたっぷり時間があると油断に満ちた時を過ごしています。

そんなことを自戒している中、私は本願寺が発行している刊行物の中にある住職の言葉を見つけました。数あるメッセージの中で氏の言葉は皆様に是非聞いて頂きたいものだと思います。

住職は四年前六十三歳で脾臓癌になりました。癌を宣告された時不思議とご自身うるたえることがなかったと回想される理由は佛法に出会っていたからと言いつけるのと述べられていました。いくべき所お浄土に往かせていただく、一足先に参られた方にまた会える。そう信じられる教えが不安を和らげ病氣と向き合う支えとなったと書いていらつしゃいました。信心深いご住職ですからそんなのだからと読ませて頂いたのですが、次の言葉に私は「そうか」と感心しました。『「いつ佛法に出遇ったか？」と問われたら、、、この病氣を得た時と答えます。』

病氣になったことで本当の意味で（生老病死）の苦しみに直面したからです。この人は佛法を伝える身の僧侶とはいえ本当にみ教えに出会っていないかったのです。本当に佛法に出会ったということは、自分を崖の淵に追い込んだ時ある意味で余分なものを身からすっかり落とした時、こころの底からみ教えが味わえた、分かったということでしょう。

私たちは限りある命と了解しながら実際にこの身に危険が来るまで気づかないのです。実は何も分かっていないのです。直前に迫るまでなかなか実感できない凡夫なのでしょう。確かにこの身の命が尽きる時と知れば「煩惱の犬は追えども去らず」といえどもおのずと本身にわが身にとっては必要なものが見えてくる。逆に命が永遠であればいつまでも煩惱の鎖に繋がれるのかもしれない。そしてこのご住職のように長い間聴聞されたみ教えが大きな力となって身内で輝き出すのでしょうか。

合掌

駐在開教使

遠藤竜平